



Title	『都の花』と『なにはがた』：＜関西文人＞の位置
Author(s)	出原，隆俊
Citation	阪大近代文学研究. 2003, 1, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『都の花』と『なにはがた』

— 関西文人Vの位置 —

出原 隆俊

一

いでや世にもてはやすなる物語草紙ふみよ、さるは東人のをほくあつめて、難波江の玉かしはは藻にうつもれ、逢坂山の岩清水は木かくれかちなるこそ口惜しけれ、(略) 慨嘆の至に堪へず、此に同好の人と謀りて、浪華文学会を設け月毎に此の草紙を編み、名けて「なにはがた」と云へり、

この西村天因の「発行辞」を掲げて、明治二十四年四月に『なにはがた』が刊行された。この時期は、東京を中心に文学雑誌が頻出し、地方でも雑誌が刊行される動きがあり、『なにはがた』もその流れの一貫と言える。

ところで、実はこの中で日本を代表する存在の『都の花』に、『なにはがた』の主要メンバーの作品が掲載されている。もともとも多いのは、武田仰天子で、第十一号(明治二十二年三月十七日)から最終第百九号(二十六年六月十八日)までで、三十八号分に渡って掲載されている。この頻度は、

依田学海、藤本藤陰、須藤南翠、山田美妙などと肩を並べるほどの多さである。『なにはがた』の創刊の頃にも、「造酒奴」が掲載されている。また、『新著百種』第十六号(二十四年七月二十五日)として「新世帯」も吉岡書籍店から刊行されている。これらのことから、仰天子は「東人」の影に「うつもれ」ていたとは言えないことが明らかになる。二十六年六月にも『蝦夷錦』が春陽堂から出版されているほどである。大阪の書肆嵩山堂からの刊行物が多いが、全国的な場でも活躍していたわけである。

これに対して、渡辺霞亭は、「東京朝日新聞」に在籍時に「三人同胞」(二十一年十一月二十一日〜二十二年一月三十日)などで知られ、『都の花』には第五号から第二十号にかけて、九号分、それに第五十、六号の二回分が掲載されているが、いずれも『なにはがた』刊行以前であり、仰天子とは対照的である。好尚堂主人(木崎好尚)の場合は、「花だより」が第六十二・三号(二十四年五月三・十七日)に掲載され、「造りもの」が第六十七・八号(九月二十日、十

月四日)に掲載されている。いずれも『なにはがた』刊行以後である。欠伸庵主人(本吉欠伸)は「若草」が『なにはがた』刊行以前の第三十・一号(二十三年一月五日・十九日)に掲載されている。西村天囚も、『なにはがた』刊行以前の第五十七号(二十四年二月十五日)に「薩摩心中」が掲載されている。天囚は、東京在住時の二十年に『屑屋の籠』で有名になった人物でもある。

『なにはがた』刊行以後の六十三・七号には、仰天子和尚堂主人の作品が同時に掲載されてもいる。『なにはがた』の同人たちには活躍する場がなかったわけではないのである。では、これらの人物において『都の花』、『なにはがた』という発表の場の違いが、掲載作品に何らかの影響を与えているのであろうか。たとえば名古屋生まれで、東京朝日新聞で活躍した後に来阪した霞亭を例に取ってみよう。『なにはがた』の第一冊には「阿琴」が掲載されている。その「(をはり)」の後には、

右の小説、世界は大阪なれど言葉は例の我流なり、別に仔細あるにはあらず、馴れぬ詞を避けたるのみ、とある。ここでは、大阪において出版された雑誌において、大阪を舞台とする小説を発表するという入役意識Vのようなものが作用していると言えるだろう。

逆に大阪生まれの仰天子はどうであらうか。『都の花』での最初の掲載誌である第十一号から連載の「三都の花」を見てみよう。東京、京都、大阪という三つの都市を作品

の舞台としているが、作品本文に入る前に、次のような記載がある。

本編脱藁の上一覧した友人の曰くに「私ははなはだ不平とす。此の小説を脚色んだ仰天子の意が憎いぞ。何も私が西京産れやさかい左様言ふのでは無いけど、西京人の性質品行を本編の通りぢやと世間へ吹聴しられては」……と斯です。が、作者はそんな深意の有るのではありません、ただ訛りを借用しただけです。

霞亭が『なにはがた』を大阪発行の雑誌であることを意識した態度のちやうど裏返しと言えるだろう。東京生まれの官吏の娘が京都で育つて東京へ戻る。それに「大阪の純粹」の娘が関わる。「西京の方が余程好え。東京なんて……」という女も絡む。作者の関西在住であることの意識が前面に出た作品といつてよいであらう。「三都の花」という題名が『都の花』を意識していることは、作中に、机の上に「都の花と女学雑誌」が置かれているとの記述があることから明らかであらう。つまり、「都」が東京のみではないという意思表示と考えられるわけである。

顔は瓜核形、総体瘦形で着てゐるものも重さうに見えます。きつぱりとして高尚い……その高尚い、厳とした所が、すなはち愛が無い——悪い所——と妬むのでしやう。着物は何か……車台に掩はれて襟まはりが見るばかり。

——あゝ悩殺——ばつくりと入る双の笑靨です。

ですます調に記号の多用。それに語り手の感想の挿入。こ

これは、明らかに『都の花』の編集主筆の美妙的の文体を想起させるものである。一方で、官職をめぐる、「……何も仰せ御尤もで氣に入ッて居るといふ様な卑屈な根性は持たんわ。」と「免職にも仕兼ねなはらん氣込みだッせ」、「詔諛といふ事をせにや用ひて呉れん時節です」の組み合わせからは、容易に「浮雲」が連想されよう。中央の文壇の作品の風潮を踏まえつつ、△関西の風Vを盛り込んだものといえようか。

これに対して、第二十五号から掲載の「相思画譜」は美濃出身の青年が上野に住む「当代の画伯」に見込まれて娘婿になることを請われるが、「眼中人なしといふ気構へ」で「蓮葉な」ところのあるその娘が苦手で、修業の名目で故郷經由で「京阪地方」まで行く。帰京したがすぐに師のもとに赴かなかつたことから、不興を買い、結果的に思う娘と結ばれることになる。師の娘は「浮雲」の、お勢を思わせるところがある。上京した青年が都会的な女性に心を惹かれていくというパターンとは逆方向といえよう。

第三十六号から掲載の「水の余波」は大阪府下で水害に遭つた娘の、男とのかかわりにまつわる苦難と、実の母との出会いの物語である。この作品においては、舞台が大阪であることの必然性はないといつてよい。

第四十五号から五十号までは、題名の「浪華土産十種」が示すとおりのものである。「口上」には、次のように記されている。

……大博覧会見物と種拾ひをかねて久々の上京、……あゝ種拾ひに来て手をつくね、却ッて大阪種を輸入するのは……その習慣風俗の異なる所を御風味下されたし。

まさに関西文人の△役割意識Vということができよう。中央の文壇において関西の情報を発信するわけである。そうだとすれば、『なにはがた』などの果たす役割は何なのかという点にもなる。△廊の相場を崩しに北船場にて、世にかくれなき好色家、「乳黄い」の恩を見事に返した男、犬と夫婦になつたといわれる男、占いをめぐる滑稽話、南地での遊興でのしくじり話、遊興におぼれた若旦那を諷めた使用人が深みに嵌る話、法事の費用をケチる男、能の趣味が身を助ける話など、遊興の地でも大阪の風俗が描かれるわけではない。題名にもかかわらず、必ずしも「浪華」である必然性はないと思われるものがほとんどである。

五十三号からの「造酒奴」は、大阪天満の造り酒屋の令嬢に心を奪われた、酒の仕込みの下働きの男が、実現不可能と思われる条件で、その娘と婚姻させてやるという周囲のその場しのぎの言葉を信じ込み、アメリカまで渡つて大金を稼いで帰国するが、その娘は既に結婚して女の子供が出来ていた。人々はその娘とそっくりの従姉妹と結婚するように勧めるが、男は娘の子供と将来結婚させてくれと願うという話である。困難な条件を課せられ、そのために心機一転して奮闘するという話型の一つと言える。

百九号の「滑稽不老術」は、人間の脳みそを動物のものと

入れ替えたなら、その動物の性質が人間に現われたという話である。「神戸又新日報」に出ていた話というのが、関西ネタである。

このように、仰天子の『都の花』誌上の作品は、『なにはがた』の発刊の前後に関わらず、原則として関西を舞台としたものばかりである。『新著百種』の「新世帯」も大阪の紡績会社の手代がその働きぶりから器量のよい娘と結婚でき、嫉妬した連中から妨害されるが、夫婦仲は維持されるという展開である。東京発信のメディアにおいて仰天子の姿勢は一貫しているといえよう。

それでは、『なにはがた』においてはどうか。最初に登場する第二冊の「艶物語」は大阪の遊郭が舞台である。第三冊の「徳用ばん傘」は実親探しの物語で、大阪、堺、泉州というまさに地元という場所を巡ることになる。第四・五冊の「若後家」は曾根崎の医師の妻の物語。第六冊の「滑稽五人男」は北の新地の遊び仲間の話。第七冊の「武士形質」は大阪に育った娘と熊本出身だが東京に在住したために国の訛りの消えた青年を結婚させようという話が食い違ふという設定である。第九冊の「うづみ火」は角座で出会った男に会いたいと天満宮に参詣する娘の話。第十一・二冊の「寒念仏」は、松屋町の商家の娘が、本家の息子と結婚させられそうになり、ついには出家してしまうという話。第十五・六冊の「女心」は大阪の天神近くで博打にうつつを抜かす夫を妻が男装して刑事に成りすまして、遊

びを止めさせようと努める話。このように、全ての作品が、大阪を舞台にしたものである。

となれば、仰天子の作品は、常に大阪を舞台にしているわけで、地元発刊の雑誌においては、常に地元を作品の舞台として読者の関心と呼ばうとし、中央の雑誌においては、関西色を打ち出すことによって特色を出していることになる。

二

霞亭の場合はどうか。『都の花』には三作品が掲載されているが、五号からの「浮世」が九号に渡って掲載され、他の二作品は一号ずつである。このことから「浮世」の重要さは明確である。東京を舞台にし、麻布在住の「金満家」の娘小川那佳子为中心的な役割を果たす。「原」は大坂生れなりしよしなれど仔細ありて此東京へ来たりしは今を距ること八年余り以前の事なり」とされているが、小川の家系は「文明開化の今日も新平民といふ肩書は取れやしない」と母が語る。そして、「お父さんの仰やるには何でも位の高い華族の次男と結婚して前方の籍をそっくり貰ふが宜いと……」いうことで和歌を贈って交際を始める切っ掛けを得ようとさせるのである。ただ、那佳子の出自は「街児から買取つて育てた」とされ、母とは違って「高尚なる品位と優美なる風趣」があるとされ、母のやり方に抵

抗を覚える。那佳子が和歌を贈った桜町子爵の次男翼綱と、その友人で、那佳子を外出先で見初めた西大路繁昌という子爵の長男が、那佳子を奪い合う形になる。那佳子は自分がした行動に咎められつつ、「誠実心切なる西大路」より「風流瀟洒たる桜町の容貌」に心が傾く。繁昌は那佳子の徳義をなくした様子と翼綱の得意の様子に意気消沈し、あるいは怒りを覚える。二人の結婚するということが公になりかけるときに、那佳子が「新平民」の子供であるということが知れ渡り、繁昌と翼綱の位置が逆転し、一方は安堵し、片方は悲嘆に暮れる。ところが、那佳子は西大路子爵の誘拐された娘、繁昌の妹であることが判明し、全ての問題が融解し、那佳子と翼綱はめでたく結婚する。思いを寄せる女性が血のつながった妹であったという構図などは、「当世書生氣質」などを想起させよう。

この作品において、大阪という場所が被差別部落の問題と関わって設定されていることが重要であろう。この問題は、霞亭の三十年代後半の作、「想夫憐」と重なる部分を持つ。京都の資産家、岩崎一彦に嫁いだ美貌の女性雅子は、大阪の多額納税者の中野清助の娘だが、「新平民」と差別される出自であった。雅子は清助からの周旋料が目当ての休職海軍大尉小泉修蔵の養女として嫁いでいたのである。雅子は一彦の母の貞子と、その姪でかつては一彦の許嫁だったが血族結婚の弊害ということから結婚がならなかった濱子からつらい仕打ちを受けていた。修蔵が金を要求するた

めに一彦から送られた指輪を金に替えたことや、死期が迫った実母と会うために、いろいろと細工をしたことから、苦難に陥る。指輪のことは自分付きの小間使いお玉が罪を被ってくれて救われる。しかし、実父と秘密に会見したところを目撃され、貞子たちから不貞の疑いをかけられ、一彦も母たちに信じ込ませられる。そのため雅子は、岩崎の家から抜け出る。離縁されそうになるが、雅子の真心によって改心した修蔵の説得により、事実を知った一彦は雅子を受け入れ、「新平民」との結婚を公表する。新聞は「人間の階級是より次第に破壊されん」と報じた。この二作品を比較すれば、「浮世」は「新平民」ではないことが確認されて一件落着の形になり、「想夫憐」では、「新平民」であっても受け入れられるということになる。部落問題の本質という点から見ても、前者と比べて後者における作者の意識が進歩的という訳ではあるまい。ただ、霞亭の認識の質がどのようなものであれ、部落差別についての関心が継続しているということは確認できるわけである。部落差別の問題の一端を小説に取り込んだものとして、仰天子作の「艶物語」がある。大阪の地で遊女をしていた女性が奪い合いをされるほどの売れっ子だったのが、ライバル筋から「お前を穢多の娘ぢやと」という噂を流されて客離れをされてしまった女性の、「男嫌ひ」と言われることについての懺悔話である。この『なにはがた』と同じ号には、第一号に続いて霞亭も執筆している。大阪という場所が被差別という事

象を取り込みやすいということになるであろうか。無論、『都の花』に第二十六号から連載の「落葉」においても「浅草の車善七」の手下が麻布の龍土あたりに出没する姿が取り込まれているように、この問題は大阪に限ったものではない。しかし、まだ東京に在住していた霞亭が大阪を舞台にした問題を『都の花』に持ち込んだことが注目されよう。

五十号に掲載の「片割月」は、大阪に移住後の作品である。大阪生れで麻布区に居住する会社の重役を務める人物が登場する。妻も京都育ちである。夫が妾のところに入りびたりで、ある深夜に帰宅し、車夫に軽く戸を叩かせて、返事がなかったので家に帰れなかったと難癖をつけ、妻を離縁してしまうという話である。ここで問題なのは、大阪出身であることが作中で何らの機能を果たしていないことである。この、冷淡な夫に薄遇される妻という設定は、一葉の「十三夜」との類似性の指摘もある、『なにはがた』第一冊に掲載の霞亭「阿琴」にも見られるものである。宗右衛門町で舞妓をしていた女に入れ揚げた夫が急死した後、儉約を旨とする姑によつて、子供は養子に出され、自身も身を引かされる羽目になる。その世知辛さや芸者たちの嫌がらせの様子など、先にも記したように、大阪という場を作中に生かそうという意識が濃厚である。

五十六号の「白菊」は尾張に「配所の月」となった師長公が、馴染んだ女を残して、「京洛」に帰ることになる。やがて、残された女は与えられた琵琶の名器を抱いて、入水

する。現代を舞台とした小説であれば、地方に行った人物が東京に戻るというパターンを踏んでいることになる。このように、『都の花』における霞亭の作品は、大阪というローカル色が色濃いわけてはいない。

霞亭は、『なにはがた』ではどうか。第一冊の「阿琴」は既に触れた。第二冊の「惟然坊伝」は芭蕉の門人の伝記であり、大阪もかわりがある。第四冊の「桃花衣」は大阪清水谷に住む女が、女手一つで育てた子供の行方が知れなくなってしまう話だが、場所が大阪でなければならぬ必然性はない。第六冊の「式心」は大阪網島に住む東京生れの青年が、両隣の娘と交際しながら、結局は本命でないほうと結婚する破目になる。ここで、東京生れであることが特別の機能を負っているわけではないし、大阪である必然性も乏しい。第八冊の「紅葉狩」は大阪心斎橋の木綿問屋に嫁いだ女性が、店の没落と夫の放蕩に泣かれ、病死するが、夫の放蕩は止まないという話である。第九冊の「初空」は大阪在住の紳士が、教育のない妻に恥をかかされるが、どうにも手の打ちようがないという趣向である。第十一冊の「舌つづみ」は滋賀県彦根から麻布に住む銀行の支配人に嫁いだ娘の話。夫には前妻との間に子供があることや、夫と姑は実の親子ではなくなにやら怪しい関係がありそうで思い悩まされるといふ筋である。第十三・五冊の「孕すゞめ」は柳橋で芸者をしていた女の嫁ぎ先に零落した実の父が訪ねてくることから不貞騒ぎに巻き込まれる。書置

きを残し姿を消していたが、年を経て夫と偶然に再会することになる。ここでは大阪という土地は一切関与していない。これは第十七冊の「捨扇」も同様である。築地に住む代言人の妻が、夫の芸者遊びに悩まされ、狂乱状態になり、結局は井戸に身を投げる。第十九・二十冊の「時の鐘」は医者妻が夫の甥が病気で看病していたが、その男に体を汚され、それを夫に告白する話である。舞台は、書生の話に吉原が出ることから東京であることが分る。全体として『なにはがた』における霞亭の作品は、第一作では大阪を強く意識していたものの大阪という土地柄から無縁になる方向にあるといえよう。

好尚堂主人（木崎好尚）の場合はどうか。六十二・三号の「花だより」は「浪花津に咲きみだれたる花の姿、」で始まるように、舞台は大阪で、木綿問屋の支店を任される、「修飾家」であることがその特徴とされる名古屋出身の青年とお嬢さんの関わりの物語である。幼い頃から顔を合わせていた中で、新年の風情と淡い交流が描かれるが、何ということも起らないままに、御嬢さんの縁談が急にまとまり、男がそれを喜ぶことで話が閉じる。六十七・八号の「造りもの」も、大阪で住吉祭りを舞台にしたものである。展示用の人形作りの騒ぎと、姉と弟の喧嘩、姉と青年の淡い心の交わりが描かれる。『なにはがた』を見てみよう。第三冊の「花八手」は仲間が寄り合って四方山話をする趣向。履物を間違えたために離縁された女が幸福な再婚をする話、

力自慢の男が見初めた女性を射止められなかった話、大阪の会社の重役の息子が京都で見初めた女が、父の知り合いで息子の嫁にしようとした女性であることが分る話、からなる。第四冊の「初あらし」は大阪船場の質屋の娘が、養子の話を取りやめになった男の代りに、医学生に心を惹かれるが、そのことから再び持ち上がった入り婿の話が取りやめになるという話である。天神の祭りなどの風俗も取り入れられている。第八冊の「善女人」は、大阪の履物屋の娘が、母を亡くし寺通いをする。若い僧は美男であったが、娘はあらぬ道へは進まなかったという趣向である。第十冊の「うなり風」は武士であった父の故地である大阪に出てきたが、盲目の母を抱えて物乞いをして暮らしていた少年が、拾った風を届に行った先で、自分たちが以前に失った金包みをその隠居が拾っていたことが判明し、貧窮を免れるという筋である。第十二冊の「一念」は、母を亡くし父が病で死期が迫っていて、娘が知人の助けを得るために、修復中の端を渡りかけて立ち往生するが、巡査に救われ、目指す家へと駆け出す話である。和泉町、農人橋などの地名が出てくる。第十四冊の「帰雁」は、京都育ちの寿司職人が、大阪の寿司屋で真面目に働き、その娘に慕われる。邪魔をする人間の妨害からは逃れたが、叔父の家の都合で京都に戻らなければならなくなり、引き裂かれる。京都を訪れる場面や大阪の地名が頻出するなど、地元の色彩が濃い。第十七冊の「しら露」は、親によつて大阪で商人奉公

のために住み込み、亡き旦那には娘の婿にとまで思われ、娘とも心を通わせていたが、近所の意地の悪い男と娘の縁談が進められ、苦悩する男の物語である。第十九・二十冊の「笑ひ茸」は、大阪から洋服仕立ての若者数人が誘われて河内の在所にやってくる。そこで発狂した女性の噂を聞く。洋服に身を飾っていた兄が放蕩から病死となり、そのために洋服を着た人に会ったり月夜になると精神に変調を来たすようになり、京都から居を移したという。若者たちの仲間の一人の行方が不明となり、その彼が娘を狂わせた洋服の男かと話題になったが、現実にはその男は娘と出会った大阪の病院へ連れて行くという。一貫して大阪に在住したこの作者にとって、発表の場の差異はないと言える。この作家においては、大阪と京都の行き来が、明治二十年代の小説としては特徴的である。

三

欠伸庵主人（本吉欠伸）は『都の花』三十・一号に「若草」を掲載している。本郷や上野が舞台で、少年同士の喧嘩と和睦、それに零落した少女が絡むものだが、ここには関西という土地は一切現われない。作者は小倉出身で、東京にも遊学経験がある。この作品が掲載された頃には大阪に在住して、浸々堂から小説を出版していたが、『なにはがた』は未だ創刊されていない。関西文人という意識がまだ

なかったものかと思われる。『なにはがた』の第一冊の「若の花」は時代物で目の不自由な夫の治療費のために一度だけ殿に身を任すが、自害する女の物語である。土地は定かではない。第四冊の「血写状」は県知事のところへ奉公していた娘が、手をつけられて身ごもるが、知事の妻に書生が相手と決め付けられ家に下がる。身を殺すことと引き換えに知事に血の手紙を送るが知事はうまくスキヤンダルから免れる。舞台は大阪に近い県下と考えられる。第五冊の「権中納言面影草紙」は、大阪玉造に住む友人の見聞を伝える形式で、犬を大事に可愛がった中納言の話が語られる。第六冊の「風流乞食」は「乞食」夫婦が夢で五十年前の子供の頃の楽しさを味わったというきわめて短い作品である。第七冊の「侘住居」は府庁の官員が妻を娶る際に免職となり、ひたすらそれを隠していたが、打ち明けたところお嬢様育ちの妻が、貧乏を苦にせずに、みすばらしいが極楽の生活を送るという話。第十冊の「煩惱」は、結ばれた男が亡くなったために尼になった女性が、文学者の誘惑に負けそうになるが拒否をする。その男が美しい妻と歩いている姿を見て涙を流してしまうという展開である。土地は不明である。第十四冊の「今小町」は、女つばいことが嫌いで夫を持つことを拒んだ女性が、結婚した妹が病で亡くなる時に夫が尽くした姿を見て自分の老後に不安を感じるが、結局一人暮らしに終わったことを一人語りする話である。場所は記されていない。第十八冊の「油画師」は、大阪の

九尺二間に住む貧乏画家が家主の商売をしるとの忠告を拒否し、家賃の支払いに困るが、絵が高く売れることになり家主を見返すという話である。

天囚居士（西村天囚）は、『薩摩心中』という九州を舞台とした歴史物を書いている。江戸期において、軟弱に流れようとする風潮に対して武士道を貫こうとする青年たちが登場する。美少年と義兄弟の関係を結んだ武士が、自分たちを逆恨みする人物を切り捨てたことから、二人が心中する破目になるという物語である。ここでも関西という土地は登場しない。『なにはがた』でも、歴史物、維新物で、大阪という土地柄とは直接に関係をもたない。このように、もとから関西に在住した作家においては、『都の花』と『なにはがた』とで作品の傾向に違いはない。一方で、大阪を出自としない作家においては、地名としての大阪は取り入れられているが、その風俗はほとんど描かれていない。

四

ところで、関西の文壇をめぐる、小さな論争があったことが注目される。『青年文学』第五号（二十五年三月二十日）に掲載された四角八面生「涙滴骨片」の「十三 西村天囚先生に与ふ」で、

「屑屋籠」以来先生関西の文壇に立て鳴る、先生の方は：唯平易をのみ旨とし、婦女子にも解し易からし

めんとするを以て絶対の目的となしたるが如し。：——滔々たる関西文学者、いづれ、文を売るの傾なきにはあらねど、特に先生に対して斯くいふもの、吾は先生に服する所あればなり

という発言がある。これに対して天囚は『なにはがた』第十三冊（二十五年五月二日）に「四角八面生に答ふる書」を発表している。

豈徒に区々二三の同好をして溢美の辞に附和雷同せしむるをもて満足せんや賞は経国の大業不朽の盛事なり大丈夫書を読んで筆を取る其目的如此し：関東にても利に走るものはあらん利に淡きものもあらん我関西も亦然り：関東の諸公も：田舎生多からん我故郷を見棄りて都門繁華の地に留り玉ふは是れ東京が文学の生存に適すればなるべし去るに関西云々と田舎視して土地に関係なき文学をも見下し玉ふことこそ心得ね

四角八面生もさらに反論するが、こうしたやり取りは注目に値する。すでに『早稲田文学』第五号（二十四年十二月十五日）の「時文評論」欄に「浪花の軽文学」の記事があり、『なにはがた』や『葦分船』、『大阪文芸』に言及している。天囚の場合は東京在住の際に注目される作品があったことが、より注目を引いたといえよう。これ以前にも、『青年文学』第一号にも、「大阪朝日新聞の小説家に告ぐ」という記事があり、「陋劣見るに忍びざるが如き小説を、時、掲げ出して、恬として恥づる色なきはそも如何、」と記されて

いた。このように、△地方▽の文学作品も、中央文壇の視野に入り始めていたのである。

「文を売る」ということでは、後に、『早稲田文学』が取り上げ、一葉も関心を示した「文学と糊口」の問題の萌芽がここに見られると言えよう。

次のような注目すべき記述もある。『なにはがた』第九冊の霞亭の「初空」に「気の毒だが心斎橋の本屋へ行ッて、造酒奴といふ本を買ッて来て呉れ、」という一節がある。この「造酒奴」とは、『都の花』五十三号から六十七号まで掲載された仰天子の作品である。『なにはがた』の掲載作品が同じ同人の（しかも同じ号に仰天子の作品の作品もある）『都の花』掲載作に言及しているわけである。『なにはがた』の同人たちが『都の花』を意識していることが明瞭に確認できるわけである。霞亭の「孕すゞめ」には東京朝日新聞を實家で読んだ妻が登場する。このように、両方の雑誌に掲載された作者に注目するとき、△読者意識▽の問題が浮上するのである。

（いずはらたかし／本学大学院教授）